

# コロナ下におけるマスク着用者に対する感情理解の変化 —教職課程の大学生を対象とした調査から—

田爪 宏二・森田 健宏\*・吉田 佐治子\*\*

## Changes in Emotion Recognition from Masked Faces during the COVID-19 Pandemic: A Survey of University Students in Teacher Training Course.

Hirotsugu TAZUME, Takehiro MORITA\* and Sachiko YOSHIDA\*\*

*Accepted November 5, 2025*

**抄録：**本研究では、マスク着用者に対する感情理解について、教職課程に所属する大学生を対象に質問紙調査を行い、コロナ下の初期・中期・収束期における特徴と、時期による変化、さらに感情理解の際に注目される手がかりについて検討した。

その結果、マスク着用者に対する感情理解の困難さは、全体としてはコロナ下を通して徐々に軽減してきた一方で、そこには個人差があることが示唆された。さらに、マスク着用者に対する感情理解では「目の表情」や「口調」が主要な手がかりとされ、マスク非着用者に対しては「顔全体」が重視されていた。加えて、マスク着用者の感情理解に困難を感じない者は「反応の頻度」「顔全体」「圧の感じ方」に注目しており、一方、マスクが非着用となった際に感情が理解しやすくなった者は「目の表情」を重視していた。

以上の結果について、教職課程における教育的支援への示唆について考察した。

**索引語：**感情理解、マスク着用者、コロナ下、教員養成

**Abstract:** In this study, a questionnaire survey was conducted with university students enrolled in a teacher training program to examine their recognition of emotions of masked faces. The analysis focused on the characteristics observed during the early, middle, and post-pandemic phases of COVID-19, changes across these periods, and the cues used for emotion recognition.

The results showed that, although difficulty in recognizing the emotions of mask wearers gradually decreased throughout the pandemic, individual differences remained. In addition, “eye expressions” and “tone of voice” were identified as the primary cues for understanding the emotions of mask wearers, whereas “the whole face” was emphasized for unmasked individuals. Finally, participants who did not perceive difficulties in recognizing the emotions of mask wearers focused on cues such as “frequency of reactions,” “the whole face,” and “perceived intensity,” while those who found it easier to recognize emotions when masks

---

\* 関西外国語大学

\*\* 摂南大学

were removed relied more on “eye expressions.”

Based on these results, implications for educational support in teacher training programs were discussed.

**Key Words:** emotion recognition, masked face, COVID-19 pandemic, teacher training

## 1. 問題と目的

### (1) マスク着用と感情理解

2020 年以降、新型コロナウイルス感染症が世界的に流行した状況下（以下、コロナ下）においては、他者への感染防止策の一環として、2023 年 3 月まで我が国の学校教育現場においてもマスクの着用が推奨されていた。その後、新型コロナウイルス感染症が感染症法上 5 類感染症に位置づけられたことを契機に、マスク着用は個人の判断に委ねられるようになった。しかしながら、その後も社会的にマスク着用が広く継続されている状況がみられる。例えばニフティ社が 2023 年 9 月に小中学生 1,328 名を対象とした調査では、小学生の 33%、中学生の 44%が、マスク着用が任意になった後も引き続き着用し続けていると回答している（ニフティ株式会社, 2023）。こうした状況のもと、教育現場においてはマスクを着用した児童・生徒の表情から心情を把握することが困難であることが指摘されている（堀, 2022 ; 松山・栗原, 2020）。このように、マスク着用によって感情の認知が阻害される状況は今後も継続する可能性があり、その特徴や困難性を明らかにすることが求められている。

表情認知やそれに伴う感情理解に関する基礎的研究として、Ekman らによる基本感情に基づく研究がある。Ekman & Boucher (1975) は文化を超えて普遍的に認識される 6 つの感情として「怒り・恐れ・驚き・嫌悪・悲しみ・幸福」を挙げており、また、Ekman & Friesen (1982) は識別可能な感情カテゴリーとして「うれしさ・驚き・恐れ・怒り・悲しみ・嫌悪・興味」の 7 つを報告している。これらをもとに、基本感情の認知に影響を及ぼす要因について検討されており、例えば郷田・宮本 (2000) は感情判断における顔の部位の影響を分析し、怒り・恐れ・驚き・悲しみについては顔上部（目周辺）が、嫌悪や幸福については顔下部（口周辺）が強く関与することを示した。

マスク着用が感情理解に与える影響についてもいくつかの研究が報告されている。例えば高橋 (2022) は、相手のマスク着用の有無による表情認識の差異を検討し、悲しみの表情については非着用時の正答率が高い一方、軽蔑の表情については着用時の方が高いことを示した。鈴木他 (2025) は、看護学生を対象とした調査において、サージカルマスクを着用した相手に対する嫌悪、恐怖、怒りといったネガティブな感情の認知の精度が低下することを報告している。なお、ポジティブ感情に関して、Saito et al. (2023) はマスク着用によりアメリカ人では喜びの認識精度が低下した一方で、日本人ではそのような影響が認められないことを報告しており、文化差が存在する可能性が示されている。

### (2) 本研究の目的

以上のように、マスク着用者に対する表情認知や感情理解に関する知見は蓄積されてきたも

の、それらに関するコロナ下の時期を通じた変化については十分に検討されていない。コロナ下ではマスク着用が常態化し、その期間は約3年間に及んでおり、この間に人々はマスク着用者に対する感情を理解する経験を積み重ね、その結果、感情理解の困難さに変化が生じた可能性がある。特に、コロナ下の時期に青年期を過ごした大学生は、学校における集団生活の中で、限られた手がかりを通して感情理解のあり方を習得してきた可能性が考えられる。

そこで本研究では、コロナ下を初期（2020年頃）、中期（2022年頃）、収束期（2023年春以降）の3期に区分し、以下の3点を検討することを目的とする。第1には、マスク着用者に対する感情理解の困難感の有無及びコロナ下を通じたその経時的変化を明らかにすることである。第2に、マスク着用者に対する感情理解において、どのような手がかりに着目していたか（感情理解のポイント）を明らかにすることである。そして第3に、感情理解における困難感と感情理解のポイントとの関連を分析することである。

なお、本研究はマスク着用者一般に対する感情理解の特徴についての検討を行うが、その成果の活用場面として大学における教員養成教育を想定している。すなわち、本研究の知見は教育現場においてマスクを着用した児童・生徒に対する適切な感情理解や、それを踏まえた関わりに必要な教師の心構えや配慮についての示唆を提供でき、それは教員養成教育においても有益なものであると考えられる。この観点から、本研究の対象者は教職課程に所属する大学生とした。

## 2. 方法

### （1）調査対象者及び調査時期

関西地方の4年制大学（3校）に在籍し、教職課程を履修する大学生及び教職大学院生計132名を対象として質問紙調査を実施した。調査時期は2024年10月であった。

調査にあたっては、対象者に対する倫理的配慮として、研究の目的、データの管理方法、個人情報保護、ならびに回答は無記名かつ任意であり授業や実習の評価に影響しないことを事前に説明し、同意を得た上で実施した。

### （2）質問項目

本研究で分析対象とした質問項目は以下のとおりである。関連する調査等の質問項目を参考に、マスク着用者に対する感情理解に関する質問紙を作成した。なお、各設問における選択枝の詳細は結果において示す。

#### 1) コロナ下初期におけるマスク着用の実態と感情理解の困難感（設問1）

設問1では、コロナ下初期（2020年頃）に関する質問を行った。設問1-1では、対象者自身のマスク着用状況について「日頃からマスクを着用していましたか」と尋ね、着用の有無や頻度についての回答を求めた。設問1-2では、コロナ下初期及び現在のマスク着用による感情理解の困難感について、「他者との対話で、相手がマスクを着用していて『感情がわからない』ということを感じたことはありましたか。そして今はいかがですか。」と質問し、困難感の程度について選択を求めた。

## 2) コロナ下中期における感情理解の困難感及び感情理解のポイント（設問 2）

設問 2 では、新型コロナウイルスの変異株の流行により沈静化が不安定である中、マスク着用が引き続き推奨されていた時期（2022 年頃、以下コロナ下中期）に関する質問を行った。まず設問 2-1 では、マスク着用者に対する感情理解について、当時を振り返り「マスクを着用している周囲の人たちとの対話や感情理解には慣れてきましたか」と質問し、困難感や慣れの程度について選択を求めた。設問 2-2 では、設問 2-1 で「慣れなかった」以外を選択した対象者に対し、感情理解のポイントについて、「マスクを着用している方の感情を理解するポイントとなる点を教えてください」と質問し、選択枝から複数回答を求めた。

## 3) コロナ収束期における感情理解、及び感情理解のポイント（設問 3）

設問 3 では、新型コロナウイルスが感染症法上 5 類感染症となり、マスク着用が推奨から個人判断へと移行した時期（2023 年春以降、以下コロナ収束期）に関する質問を行った。設問 3-1 では、「相手がマスクを着用していた頃と比べて、感情理解がしやすくなりましたか」と尋ね、どの程度理解しやすくなったかについて選択を求めた。設問 3-2 では、設問 3-1 で「マスク着用者と非着用者といずれも感情の理解しやすさに変わりはない」以外を選択した対象者に対し、「どのような理由でわかりやすくなったのでしょうか」と質問し、選択枝から複数回答を求めた。

## 4) 教師としてマスクを着用した児童・生徒との対話における感情理解の認識（設問 4）

対象者が教職課程を履修する学生であることを踏まえ、設問 4 では、対象者が将来教師になったことを想定した場合に、マスクを着用した児童・生徒との対話における感情理解の困難さに関する認識を尋ねた。設問では、「将来教師になった時、児童・生徒との対話時に、マスクを着用した子どもの気持ちを察することに困難さを感じると想像しますか」と質問し、大人と比較した場合の児童・生徒の感情理解の困難さの程度について選択を求めた。

### (3) 分析方法

本研究では、まず質問紙の各設問における集計結果について、コロナ下の初期・中期・収束期それぞれの特徴を分析する。次に、マスク着用の有無による感情理解の差異を明らかにするため、コロナ下中期におけるマスク着用者に対する感情理解のポイント（設問 2-2）と、コロナ収束期におけるマスク非着用者に対するそれ（設問 3-2）を比較する。さらに、マスク着用者の感情理解の困難さ（設問 2-1、3-1）を規定する要因として、マスク着用者に対する感情理解のポイント（設問 2-2）がどのように影響しているかを分析する。各分析に用いた具体的な手法については、結果の項で述べる。

## 3. 結果

### (1) 各質問における基礎集計

#### 1) コロナ下初期におけるマスク着用の実態と感情理解の困難感（設問 1）

設問 1 における選択枝の項目と回答（選択）の結果を表 1-1、1-2 に示す。なお、設問 1-2 の選択枝に付されている数字は、困難感の大きさに対応するよう順序尺度として配置されている（以降の設問 2-1 についても同じ）。

表 1-1 より、コロナ下においてはほとんどの対象者がマスクを着用していたことがわかる。また、対象者の約 33%（選択枝 4 と 5 の合計）はコロナ下の以前から常時、あるいは必要な季節にマスクを着用していたことも示された。表 1-2 より、マスクを着用している相手の感情理解に当初から困難を感じなかったとする回答（選択枝 1）は少数であり、多くの対象者はコロナ下の生活の中で徐々に慣れつつも、マスクを着用している相手の感情の理解においてある程度の困難さを抱えていたことが窺われる。

表 1-1 コロナ下初期（2020 年頃）におけるマスク着用の実態（設問 1-1）

| 項目                                 | N(%)      |
|------------------------------------|-----------|
| 1.コロナウイルスが広がっていった時期でも着用していなかった     | 1 (0.8)   |
| 2.この頃から、登校や外出など、必要な時期のみ着用するようになった  | 38 (28.8) |
| 3.この頃から、食事時などをのぞき、常時着用するようになった     | 49 (37.1) |
| 4.この時期以前から、必要な時期（例：花粉症の緩和）には着用していた | 38 (28.8) |
| 5.この時期以前から、いつもマスクを着用していた           | 6 (4.5)   |

表 1-2 コロナ下初期における感情理解の困難感（設問 1-2）

| 項目                                   | N(%)      |
|--------------------------------------|-----------|
| 1.当初から今でも、マスクで相手の感情がわからないということは特にない  | 19 (14.4) |
| 2.当初から、相手がマスクをしていても、なんとなく感情を理解できていた  | 29 (22.0) |
| 3.当初、わかりにくいと思ったことはあったが、わかるポイントが見えてきた | 22 (16.7) |
| 4.当初、わかりにくいと思ったことはあったが、今は何となくわかってきた  | 37 (28.0) |
| 5.わかりにくいと思ったことがあったし、今もわからない時がある      | 25 (18.9) |

## 2) コロナ下中期における感情理解の困難感（設問 2-1）

設問 2-1 における選択枝の項目と回答結果を表 2 に示す。コロナ下中期においてマスクを着用している相手の感情理解に慣れていない（困難さを感じている）とする回答（選択枝 5）は少数であり、多くの対象者はマスクを着用している相手の感情理解に慣れてきていたことが窺われる。

表 2 コロナ下中期（2022 年頃）における感情理解の困難感（設問 2-1）

| 項目                           | N(%)      |
|------------------------------|-----------|
| 1.元々、感情理解に困難さは感じていないので、変わらない | 26 (19.7) |
| 2.すぐに慣れた                     | 27 (20.5) |
| 3.意外と早く慣れてきた                 | 28 (21.2) |
| 4.少しずつ慣れてきた                  | 45 (34.1) |
| 5.慣れなかった                     | 6 (4.5)   |

## 3) コロナ収束期における感情理解（設問 3-1）

設問 3-1 における選択枝の項目と回答結果を表 3 に示す。なお、設問の選択枝に付されている数字は、感情理解の容易さに対応するよう順序尺度として配置されている。対象者の多く、約 83% が、相手がマスク着用をしていた頃と比較して感情の理解がしやすくなった（選択枝 2 と 3 の合計）と回答していた。

表 3 コロナ収束期（2023 年春以降）における感情理解（設問 3-1）

| 項 目                                | N(%) <sup>※</sup> |
|------------------------------------|-------------------|
| 1.マスク着用者と非着用者といずれも感情の理解しやすさに変わりはない | 23 (17.6)         |
| 2.少しわかりやすくなった                      | 30 (22.9)         |
| 3.とても理解しやすくなった                     | 78 (59.5)         |

※% は欠損値 1 を除く N=131 に対する割合

#### 4) コロナ下中期、収束期における感情理解のポイント（設問 2-2、3-2）

コロナ下中期におけるマスク着用者に対する感情理解のポイント（設問 2-2）、及びコロナ収束期におけるマスク非着用者に対するそれ（設問 3-2）について、選択枝の項目と回答結果を表 4 に示す。

コロナ下中期におけるマスクを着用している相手の感情理解のポイントとして多く選択されていたものは「目の表情」「口調」であり、これらは回答者の半数以上が選択していた。次いで多いものとしては「視線の合い方」「うなずき」「声の大きさ」「身振り手振り」は回答者の 3 分の 1 以上が選択していた。

一方、コロナ収束期におけるマスク非着用者に対する感情理解のポイントについて、感情の理解がしやすくなった理由として多く選択されていたものは「顔全体を見て」であり、マスクを外すことで顔全体を認識できるようになり、感情把握が容易になったことが推察される。次いで「目の表情」「声の大きさ」が多く選択され、これらはマスク着用者に対する感情理解のポイント（設問 2-2）と共通するものであった。

マスク着用者とマスク非着用者それぞれに対する感情理解のポイントについて、項目毎に直接確率計算により両者の選択率の差異を比較した。表 4 内の不等号は、両者の間に有意な差がみられた項目を示している。マスク着用者における選択がマスク非着用者に対するそれを上回った項目は「目の表情」「視線の合い方」「口調」「うなずき」「身振り手振り」であり、これらの項目はマスク非着用者よりもマスク着用者の感情理解のポイントとして注目されることが示唆された。

他方で、「顔全体を見て」「マスクの形状／口元の様子」については、マスク非着用者における選択がマスク着用者に対するそれを上回っており、これらの項目はマスク着用者よりもマスク非着用者の感情理解のポイントとして注目されがちであると考えられる。

#### 5) 教師としてマスクを着用した児童・生徒との対話における感情理解の認識（設問 4）

設問 4 における選択枝の項目と回答結果を表 5 に示す。回答者の半数以上がマスクを着用した児童・生徒の感情理解が大人と比べてわかりにくくなると回答しており、児童・生徒の方が分りやすい、あるいは大人に比べて困難さを感じないとする回答を有意に上回っていた ( $\chi^2(2) = 33.45, p < .001$ )。

#### (2) コロナ下初期、中期におけるマスク着用者に対する感情理解の困難感、収束期におけるマスク着用者に対する感情理解の容易さの相関

ここでは、マスク着用者・非着用者に対する感情理解について、コロナ下の各時期（コロナ下初期、中期、収束期）間の関連を分析する。分析方法としては、設問 1-2 および 2-1 の選択枝

表 4 コロナ下中期、収束期における感情理解のポイント（設問 2-2、3-2）

| 項目                           | 感情理解のポイント          |                      |
|------------------------------|--------------------|----------------------|
|                              | マスク着用者<br>(設問 2-2) | マスク非着用<br>者 (設問 3-2) |
| a.目の表情                       | 111 (86.5) >       | 44 (40.7) ***        |
| b.視線の合い方                     | 50 (38.9) >        | 25 (23.1) **         |
| c.声の大きさ                      | 43 (34.1)          | 34 (31.5)            |
| d.口調                         | 69 (53.2) >        | 29 (26.9) ***        |
| e.顔全体を見て                     | 30 (23.0) <        | 95 (88.0) ***        |
| f.うなずき                       | 48 (38.1) >        | 22 (20.4) **         |
| g.身振り手振り                     | 43 (34.1) >        | 17 (15.7) **         |
| h.距離感                        | 20 (15.9)          | 16 (14.8)            |
| i.圧の感じ方                      | 15 (11.9)          | 8 (7.4)              |
| j.発話のタイミング                   | 8 (6.3)            | 10 (9.3)             |
| k.反応の頻度                      | 20 (15.9)          | 13 (12)              |
| l.(着用者)マスクの形状<br>(非着用者)口元の様子 | 11 (8.7) <         | 29 (26.9) ***        |
| m.その他                        | 1 (0.8)            | 2 (1.9)              |

数値は選択数（括弧内は回答者数（設問 2-2 :  $N=126$ 、設問 2-3 :  $N=108$ ）

における割合）。\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$

表 5 教師としてマスクを着用した児童・生徒との対話における感情理解の認識（設問 4）

| 項目                              | $N(\%)^{**}$ |
|---------------------------------|--------------|
| 1.大人と比べて、特に困難さは感じないと思う          | 16 (12.2)    |
| 2.大人と比べて、児童・生徒の方がわかりやすいと思う      | 45 (34.4)    |
| 3.大人と比べて、児童・生徒については、わかりにくくなると思う | 70 (53.4)    |

\*\*% は欠損値 1 を除く  $N=131$  に対する割合

に付された数値を、マスク着用者に対する感情理解の困難感の程度を示す順位尺度（1～5で、値が大きいほど困難感が高い）と見なし、また、設問 3-1 の選択枝に付された数値をマスク非着用者に対する感情理解の容易さの程度を示す順位尺度（1～3で、値が大きいほど容易さが高い）と見なした上で、これらの間の順位相関係数（ $\rho$ ）を算出した。結果を表 6 に示す。

分析の結果、すべての変数間に有意な正の相関が認められた。すなわち、コロナ下初期、中期におけるマスク着用者に対する感情理解の困難感と、収束期における非着用者に対する感情理解の容易さの三者の間には、それぞれ正の関連性があると言える。特に、コロナ下初期と中期との相関が高く、マスク着用者に対する感情理解の困難感の程度が、コロナ下の期間を通して比較的持続していたことが示唆された。

### (3) コロナ下中期におけるマスク着用者に対する感情理解の規定因

ここでは、コロナ下中期において、感情を理解するためにどこに注目しているかが、マスク着用者の感情理解の困難さを規定しているかについて検討するため、マスク着用者の感情理解の困難さ（設問 2-1）の規定因としての、感情理解のポイント（設問 2-2）の項目の影響につい

表 6 コロナ下初期、中期におけるマスク着用者に対する感情理解の困難感（設問 1-2、2-1）、収束期におけるマスク非着用者に対する感情理解の容易さ（設問 3-1）の相関

| コロナ下初期（設問 1-2） |                | コロナ下中期   |
|----------------|----------------|----------|
| コロナ下中期（設問 2-1） | コロナ収束期（設問 3-1） | コロナ収束期   |
| .561 ***       | .374 ***       | .283 *** |

数値は順位相関係数 ( $\rho$ )。\*\*\*  $p < .001$

て分析する。

ロジスティック回帰分析を用いて、設問 2-1 の選択枝毎に選択の有無を目標変数として、設問 2-2 の各項目を投入し説明変数を選択した。すなわち、目標変数及び説明変数のいずれも選択の有無、すなわち 2 値のカテゴリカルなデータであり、分析上は選択を 1、非選択を 0 とした（以降の同分析についても同様の手法を用いた）。なお、設問 2-1 において「5. 慣れなかった」を選択した者は設問 2-2 に回答していないため、分析から除外した。

結果を表 7 に示す。感情理解に「元々困難さがない」と回答した者のみにについて、決定係数が有意であった。そこにおける説明変数としては「身振り手振り」が負の、「顔全体を見て」が正の、それぞれ有意な影響を与えており、「反応の頻度」、「圧の感じ方」については正の影響の有意傾向がみられた。つまり、感情理解に困難さがない者はそれ以外の者に比べて「顔全体」、「反応の頻度」、「圧の感じ方」に注目し、「身振り手振り」には注目していなかったと言える。

表 7 コロナ下中期におけるマスク着用者に対する感情理解の困難感における感情理解のポイントの影響（ロジスティック回帰分析）

| マスク着用者に対する感情理解のポイント（設問 2-2） | コロナ下中期における感情理解の困難感（設問 2-1） |          |            |             |
|-----------------------------|----------------------------|----------|------------|-------------|
|                             | 1 困難さは感じていない               | 2 すぐに慣れた | 3 意外と早く慣れた | 4 少しずつ慣れてきた |
| a. 目の表情                     | -.049                      | .917**   | -.044      | -.070       |
| b. 視線の合い方                   | .019                       | .101 †   | -.104 †    | -.046       |
| c. 声の大きさ                    | -.056                      | -.008    | .042       | -.004       |
| d. 口調                       | .116                       | -.043    | .105 †     | -.176       |
| e. 顔全体を見て                   | .202 †                     | .036     | -.009      | -.197 †     |
| f. うなずき                     | -.065                      | -.068    | .034       | .108        |
| g. 身振り手振り                   | -.267*                     | .036     | -.024      | .126        |
| h. 距離感                      | .051                       | .007     | -.097      | .084        |
| i. 圧の感じ方                    | .170 †                     | -.012    | -.068      | -.029       |
| j. 発話のタイミング                 | -.147                      | -.055    | .039       | .120        |
| k. 反応の頻度                    | .212*                      | -.007    | -.108      | -.038       |
| l. マスクの形状                   | -.070                      | .023     | -.845**    | .099        |
| 決定係数 ( $R^2$ )              | .287*                      | .870     | .822       | .144        |

数値は標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .10$

#### (4) コロナ収束期におけるマスク非着用者に対する感情理解の規定因

##### 1) マスク着用者の感情理解のポイントの影響

ここでは、コロナ収束期におけるマスク非着用者に対する感情理解の規定因としての、感情理解のポイントの影響について検討する。

まず、コロナ下中期において、マスク着用者の感情を理解するためにどこに注目しているかが、コロナ収束期におけるマスク非着用者の感情理解の容易さを規定しているかについて検討する。前節と同様にロジスティック回帰分析を用いて、設問 3-1 の選択枝毎に選択の有無を目標変数として、設問 2-2 の各項目を投入し説明変数を選択した。その際、設問 2-1 において「慣れなかった」を選択した者は設問 2-2 に回答していないため、分析から除外した。結果を表 8 に示す。

感情理解について「理解しやすさに変わりはない」及び「とても理解しやすくなった」と回答した者のみについて、決定係数が有意であった。前者における説明変数としては、「口調」が正の、「目の表情」が負の、それぞれ有意な影響を与えており、「視線の合い方」は正、「身振り手振り」は負の影響の有意傾向がみられた。後者における説明変数としては、「目の表情」が正の、「顔全体を見て」が負の、それぞれ有意な影響を与えており、「口調」については負の影響の有意傾向がみられた。これらの結果をまとめると、相手がマスク非着用になることで感情理解がしやすくなった者ほど「目の表情」に注目し、「口調」や「顔全体」には注目していなかったと考えられる。

表 8 コロナ収束期におけるマスク非着用者の感情理解における、マスク着用者の感情理解のポイントの影響（ロジスティック回帰分析）

| マスク着用者に対する感情理解のポイント(設問 2-2) | コロナ収束期におけるマスク非着用者の感情理解(設問 3-1) |               |                |
|-----------------------------|--------------------------------|---------------|----------------|
|                             | 1 理解しやすさに変わりはない                | 2 少しわかりやすくなった | 3 とても理解しやすくなった |
| a.目の表情                      | -.303**                        | -.027         | .238*          |
| b.視線の合い方                    | .206 †                         | -.104         | -.062          |
| c.声の大きさ                     | -.072                          | -.007         | .059           |
| d.口調                        | .387**                         | -.050         | -.170 †        |
| e.顔全体を見て                    | .018                           | .229*         | -.190 †        |
| f.うなずき                      | -.150                          | .203 †        | -.061          |
| g.身振り手振り                    | -.193 †                        | .094          | .035           |
| h.距離感                       | .090                           | .021          | -.070          |
| i.圧の感じ方                     | .118                           | .099          | -.182          |
| j.発話のタイミング                  | -.141                          | .046          | .049           |
| k.反応の頻度                     | .072                           | .091          | -.150          |
| l.マスクの形状                    | .019                           | .098          | -.076          |
| 決定係数 ( $R^2$ )              | .361**                         | .124          | .220*          |

数値は標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .10$

## 2) マスク非着用者の感情理解のポイントの影響

次に、コロナ収束期において、感情を理解するためにどこに注目しているかが、マスク非着用者の感情理解の容易さを規定しているかについて検討を行うため、コロナ収束期におけるマスク非着用者の感情理解の容易さ（設問 3-1）の規定因としての、感情理解のポイント（設問 3-2）の項目の影響について分析する。前節のコロナ下中期と同様の方法により、設問 3-1 の各選択枝を目標変数とし、選択枝毎に設問 3-2 の各項目を投入し、説明変数を選択した。その際、設問 3-1 において「マスク着用者と非着用者といずれも感情の理解しやすさに変わりはない」を選択した者は設問 3-2 に回答していないため、分析から除外した。

分析の結果、設問 3-1 のいずれの選択枝においても設問 3-2 から有意な説明変数は得られず、マスク非着用による感情理解の容易さの規定因は明らかにできなかった。

## 4. 考察

本研究では、教職課程を履修する大学生を対象に、コロナ下の初期・中期・収束期におけるマスク着用者に対する感情理解の困難感の変化、感情理解のポイント及び両者の関係を中心に検討した。以降では、分析結果についてまとめるとともに、それを踏まえた教員養成における教育的支援の可能性について考察する。

### (1) 調査結果の総括

#### 1) マスク着用者に対する感情理解の変化

本研究で得られた結果を整理すると、次の通りである。まず、コロナ下の初期においては、ほとんどの対象者がマスクを着用しており、マスク着用者の感情理解に一定の困難を経験していた。ただし、コロナ下の中期においては困難感を抱く者は減少し、多くの対象者がマスク着用者の感情理解について慣れてきたと回答していた。この結果から、マスクの着用が常態化したコロナ下において、時間の経過に伴い、対象者はマスク着用者とのコミュニケーションや感情理解が求められる環境に適応していたことが推察される。そして、コロナ収束期においてはマスクが非着用になることにより感情理解が容易になったとする回答が多くを占め、マスクを外すことが感情理解の改善に繋がることが示唆された。

このような、時期による変化の一方で、初期・中期・収束期における感情理解の困難さの間には正の相関がみられていた。この結果は、感情理解や表情認知に関わる能力の個人差は、コロナ下の時期を通して持続することを示唆するものであると解釈できる。

なお、マスク着用による感情理解の困難については、本研究の対象である大学生に限らず、学齢期の児童・生徒に関しても報告がみられる。例えば後藤他（2022）は、中学生がコロナ下において他者の非言語的行動を気にするようになり、コミュニケーションスキルに起因する他者理解の困難が増加していること、そしてその一因としてマスク着用による感情理解の困難が存在することを指摘している。つまり、本研究の対象者が回想したコロナ下の時期は高校から大学初期に相当すると考えられるが、それ以前を含む学齢期から青年期にかけての広範な時期においても、マスク着用による感情理解の困難が存在していたことが考えられる。

#### 2) 感情理解のポイント

コロナ下中期におけるマスク着用者の感情理解では「目の表情」や「口調」が主要な手がかりであり、「視線の合い方」「うなずき」「声の大きさ」「身振り手振り」もある程度利用されていた。この結果から、対象者はマスクで隠れない目や視線、うなずきや身振りといった身体表現、さらには口調や声量などの音声的要素など、マスクをしていても知覚可能な要素から感情を把握しようとしていたことが推察される。

これに対してコロナ収束期におけるマスク非着用者の感情理解では「顔全体」や「口元」が重視されていた。顔の特徴や感情は、全体的処理、すなわち顔の個々の構成要素よりも、それ

らが統合された全体として認識されると考えられている (Leopold & Rhodes, 2010)。他方で、細かい表情の認識においては顔の構成要素に注意を向けるといった局所的な処理が行われていることも指摘されている (赤塚, 2016)。本研究の結果も、マスクを外すことにより見るができるようになる口元という局所的な情報とともに、それを含む顔全体的な情報が感情理解において有用であることを示唆するものであると考えられる。

### 3) マスク着用者に対する感情理解の規定因

コロナ下中期においてマスク着用者の感情理解に困難を感じない者は「反応の頻度」「顔全体」「圧の感じ方」に注目し、「身振り手振り」への注目は低かった。この結果は、当初からマスク着用者に対する感情理解に困難感がない者の特徴として、感情把握において細かい顔の部分や動きよりも全体的な雰囲気注目していることを示唆するものであると考えられる。

また、収束期においては、マスクが非着用となった際に感情が理解しやすくなったとする者は、「目の表情」を重視していた一方で、「口調」や「顔全体」には依存していなかった。この結果については、マスク着用者の感情理解において目の表情に注目していた者は、相手がマスクを外し、他の要素が加わることで感情理解が容易になると解釈することができる。一方で、口調や顔全体から感情理解を試みていた者は、相手がマスク非着用であっても感情理解の容易さは変わらなかったことが示唆された。

## (2) 本研究の結果を踏まえた、教職課程における教育的支援への示唆

本研究においては、対象である教職課程を履修する学生の半数以上が、マスクを着用した児童・生徒の感情理解は大人に比べて難しいと回答していた。この結果から、学生の中にはこれらの児童・生徒の感情理解やそれに基づく適切な関わりに課題を抱える者がいることが予想される。したがって、教職課程における教員養成教育においては、こうした課題を解決するための取り組みが必要であると考えられる。

本研究の知見を応用すれば、例えば、マスク着用者の感情理解に困難を感じない者が着目しているとされる「顔全体の観察」「反応の頻度」「圧の感じ方」などに注意を向けた感情理解やコミュニケーションの演習、ロールプレイ等を導入することが有効な方策として考えられる。

ところで、マスク着用による感情理解に対する教育現場での支援については、いくつかの知見が提出されている。例えば松山・栗原 (2020) は、コロナ下におけるマスク着用による児童同士の感情理解の困難さに基づくミスコミュニケーションやそれによるストレスの増加などの課題に対して、感情・体調の種別に応じたカードを用いた支援の効果を経験している。それによると、支援により相手の感情の理解が促進されるとともに、怒りや倦怠感などのネガティブな感情の反応が減少したとされている。本研究において得られた感情理解の特徴に関する知見とあわせて、このような学校における具体的な実践の在り方について学ぶことも、マスクを着用した児童・生徒の感情理解と支援に関するスキルを身につける上での一つの方策になると思われる。

## (3) 今後の課題

本研究では、コロナ下の状況を振り返る回想法による検討を行った。質問紙法を用いた本研究の結果からは、マスク着用者に対する感情理解についての全体的な傾向を把握することは可

能であったと考えられるが、より詳細な知見を得るためには実験的手法を用いた検討が必要である。特に、感情理解の手がかりとして注目される点については無意識下で生じる可能性があるため、実際の面接場面における視線計測などの生理的指標を用いた検討が有効であると思われる。マスクの有無による感情理解に関する実験的研究としては、画像から感情の種類を同定するなどの検討が行われている (Furumi et al., 2023 など)。しかし、より現実場面に近い知見を得るためには、動画を提示刺激として、感情の同定だけでなく文脈に基づくその変化についても検討する必要があると考えられる。

また、教育場面への応用を視野に入れた研究という点から、生徒指導や教育相談の場面を想定した検討が求められる。その際、本研究の対象であった大学生は児童・生徒と関わる機会が限定されているため、日常的に児童・生徒と接している現職教員を対象とした調査や、現職教員と学生との比較を行う必要があると考えられる。

## 引用文献

- 赤塚 瞳 (2016) 「表情認識における局所的な処理と全体的な処理」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』 22, pp.129-140.
- Ekman, P., & Boucher, J. D. (1975) Facial areas and emotional information. *Journal of Communication*, 25, 32-49.
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1982) Felt, false and miserable smiles. *Journal of Nonverbal Behavior*, 6, 238-252.
- Furumi, F., Fukazawa, M., & Nishio, Y. (2023) Can preschoolers recognize the facial expressions of people wearing masks and sunglasses? Effects of adding voice information. *Journal of Cognition and Development*, 24, 623-635.
- 郷田賢・宮本正一 (2000) 「感情判断における顔の部位の効果」『心理学研究』 71, pp.211-218.
- 後藤美由紀・中條和光・森田愛子 (2022) 「感染症予防行動が中学生のコミュニケーションの困難感に与える影響：対人スキルの観点から見たコロナ禍における自他の心と体を守る力の育成」『広島大学附属東雲中学校研究紀要 (中学教育)』 51, pp.68-81.
- 堀 由里 (2022) 「幼児の感情理解に及ぼすマスクと音声の影響：コロナ禍の表情認知に対する試行的検討」『桜花学園大学保育学部研究紀要』 25, pp.173-178.
- Leopold, D. A., & Rhodes, G. (2010) A comparative view of face perception. *Journal of Comparative Psychology*, 124, 233-251.
- 松山康成・栗原慎二 (2020) 「他者理解を促進する感情体調共有ポケットチャートの開発：新型コロナウイルス感染症流行下におけるミスコミュニケーション予防」『学習開発学研究』 13, pp.79-85.
- ニフティ株式会社 (2023 年 3 月 30 日掲載) 「『マスク着用』に関する調査レポート」ニフティキッズ, 2025 年 9 月 12 日閲覧, <https://kids.nifty.com/parent/research/>
- Saito, T., Motoki, K., & Takano, Y. (2023) Cultural differences in recognizing emotions of masked faces, *Emotion*, 23, 1648-1657.

鈴木里穂・坂本真優・梅本知子・河村奈美子（2025）「看護学生のサージカルマスク着用者の表情認知に関する研究：看護学生の学年間の比較から」『看護科学研究（大分県立看護科学大学看護研究交流センター）』24, pp.14-22.

高橋直樹（2022）「マスク着用時における表情の認識に関する研究（第一報）」『環太平洋大学研究紀要』20, pp.151-153.

## 付記

本研究は科学研究費助成事業「教育相談場面における児童生徒のマスク着用による心情理解のあり方と支援方法の開発」（基盤研究（C）24K06013）による研究の一部である。本研究の一部は日本発達心理学会第36回大会（2025）及び日本教育心理学会第67回総会（2025）において発表した。

本論文においては、第1著者は主に論文全体の構成及び調査の分析に関する執筆を行い、第2著者及び第3著者は主に研究の背景及び考察に関する執筆を担当した。

